

【学術変革領域研究（A）】

区分 I



研究領域名 生涯学の創出—超高齢社会における発達・加齢観の刷新

京都大学・人間・環境学研究所・教授

つきaura たかし
月浦 崇

領域番号： 20A101 研究者番号： 30344112

【本研究領域の目的】

本研究領域は、従来の「成長から衰退へ」という固定的な発達・加齢観を刷新し、人間の生涯における変化を、社会との相互作用の中で多様な成長と変容を繰り返す生涯発達のプロセス（図1）として明示することを目的とする。そして、人間に関する多様な学問分野を融合することで、新しい学際的研究分野としての「生涯学」を創出する。その目的を達成するため、行動解析を基盤とする認知心理学的研究、脳機能の計測による生理心理学的研究、精神・神経疾患を対象とする臨床心理学的研究、社会調査を基にした社会学的研究、多様な文化を対象としたフィールド調査を基にした文化人類学的研究などの基盤的研究と、それらの基盤的研究の成果を社会実装するための教育学的研究を有機的に連携させ、基礎から応用までの展開を進める多元的な人間研究を実施する。本研究領域の進展により、全世代の人々が豊かな人生を享受できる超高齢社会を実現するための科学的基盤の解明と、その成果を元にした社会実装を行い、新しい生涯観を社会と共有することを目指す。

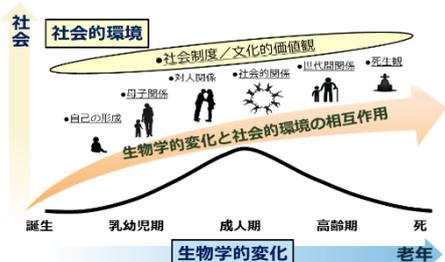


図1 生涯発達概念図

【本研究領域の内容】

本研究領域では、既存の学問分野に留まらない広範で多元的な研究を実施することで、従来の生涯観を刷新するための心理・社会メカニズムの解明とその社会実装を進める。

具体的には、高齢期でも獲得できる認知機能の性質と、高齢期には獲得しにくく衰退・消失してしまう認知機能の性質を若年者との比較の中で実験的に明らかにし、柔軟な可塑性が引き出されるメカニズムを明らかにする（認知心理学、生理心理学）。また、認知機能障害の実態とそれに関わる認知予備力について検討する（臨床心理学）。さらに、多様な実社会において、様々な世代や障害に対する適切な生涯観に依拠しつつ、新たな発達・加齢観の下で育まれる豊かな生涯を支えるために、効果的なソーシャルサポートとはどのようなものかを大規模社会調査から明らかにする（社会学）。そして、知識や技能の獲得過程と成熟過程若しくは消失過程が、文化や生活環境

が違う場所でどのように発現しているのか、社会制度や生態環境によってどのような影響を受けるのか、多様な人類社会においてどのような発達観や加齢観、ライフサイクルがあるのかを多様な社会集団に対するフィールドワークから明らかにし、それらの比較を通して多様な生涯観を相対化することで、新たな生涯観を生み出す社会的要因とその可能性と限界を探る（文化人類学）。その上で、これらの基礎的知見を基盤としつつ、地域や個人に即した社会教育プログラムを実践することで、新たな生涯観の中で実現される社会教育プログラムを実装する（教育学）。このようにして、人間に関する諸科学、すなわち心理学、文化人類学、社会学、教育学等を融合して基礎から応用への展開を進め、更にそれらの研究を循環させることで、従来の発達・加齢観を刷新する新たな「生涯学」を創出する（図2）。

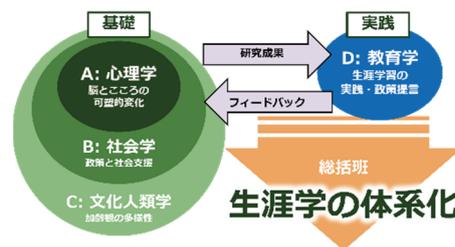


図2 領域の全体構成

【期待される成果と意義】

本研究領域の中心的な成果は、「生涯学」という新しい加齢観に根差した学際的な研究領域を世界に向けて確立することであり、超高齢社会に有益となる新たな生涯観を社会へ提供することである。すなわち、新しい生涯観に裏打ちされた人間発達の実態を明らかにすることで、生涯発達という発想を社会に広め、人間が年齢を重ねていく中でいかに柔軟性と多様性を持つ存在であるかを示せるはずである。また、脳機能の加齢による可塑的変化のメカニズムを理解し、それに基づいた教育法の開発も期待できる。それは同時に、新しい生涯観に基づく豊かな超高齢社会の実現に向けた科学的基盤を提供することでもある。

【キーワード】

（神経）可塑性：神経系が、外的環境や心理学的要因等の影響によって機能的・構造的に変化する性質。

【領域設定期間と研究経費】

令和2年度－6年度 759,600千円

【ホームページ等】

<https://www.lifelong-sci.jinkan.kyoto-u.ac.jp>



研究領域名 土器を掘る：

22 世紀型考古資料学の構築と社会実装をめざした技術
開発型研究

熊本大学・大学院人文社会科学研究所（文）・教授

おばた ひろき
小畑 弘己

領域番号： 20A102 研究者番号：80274679

【本研究領域の目的】

現代は農耕を基盤とする社会である。旧大陸において人類はおよそ1万～8千年前に野生植物を栽培し始めた。日本においても約3千年前にイネやアワなどの穀物が朝鮮半島から流入し、数千年を経て本格的な農耕社会へ移行した。弥生時代の始まりである。これが教科書で私たちが習った歴史である。しかし、最近の考古学研究では、実は植物栽培は7000年ほど前に縄文人たちの手によって既に行っていたことが明らかになっている。これを明らかにしたのが土器中に残るタネやムシの痕跡であり、この調査法を「圧痕法」と呼ぶ。本手法は既存の歴史観を大きく変える数々の発見をもたらした。

本研究領域は、この手法を発展させ、これまで考古学者が気付かなかった植物栽培や農耕の歴史を雄弁に物語る土器中の生物や植物加工物の痕跡を最新のX線技術やAIを用いて最大限にあぶり出し、栽培の開始や農耕伝播の正確な時期を探るとともに、「農耕化は人類に何ををもたらしたか」という人類の命題にチャレンジするものである。

【本研究領域の内容】

本研究領域は、全国に保管されている整理済み・整理中の土器から軟X線やX線CT機器により新しい情報を発掘し、先の命題に対する答えを導き出すとともに、22世紀を見据えた世界に誇る新たな考古資料学「土器総合分析学」を構築する。これを達成するために、五つの学際的な研究グループを準備した。各グループはそれぞれで先端を極める開発研究を行うとともに、A01グループが供給する基礎資料を共同で分析し、より効果的な分析成果を得よう研究組

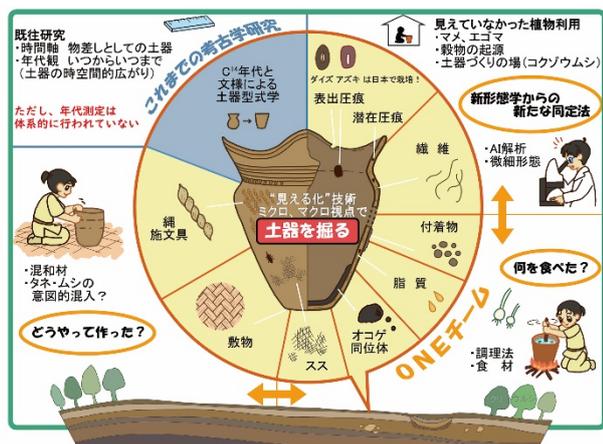


図1. 本領域研究の研究手法と研究対象の概念

織をシステム化した。A01グループはX線機器により、圧痕試料を掘り出し、各グループに供給するという領域研究の要の部分を担当。開発研究では、より効果的な検出法の開発とAIによる種同定法の開発を目指す。A02グループは新形態学を構築する研究計画組織であり、ここには植物学・昆虫学・薬学・貝類学の専門家が集結する。植物利用の実態を解明するとともに、変形・変質試料という考古試料に特化した、従来にはない動植物の同定法の開発を目指す。A03グループは土器の植物性混和材を主な研究対象とし、X線CTを用いた混和材同定法の確立やプラントオパール分析による栽培イネの出現時期や混和材との利用を探る。B01グループは微量炭素の年代測定や脂質分析を行う化学チームである。B02グループは植物種実の年代と土器型式の関係を探り、より精緻な土器編年を作り上げる役目を担う。栽培植物や大陸系穀物がどのように伝播していったかを正確な型式編年網上で検討する、重要な役目を担う。

【期待される成果と意義】

本研究領域は、土器内外の痕跡から植物利用の歴史や社会と人々の暮らしと精神性を復元する「土器総合分析学」を提唱し、その方法の構築と有効性の実証を目指すとともに、植物栽培（農耕化・定住化）の歴史とその人類に与えた影響に関する新たな情報の抽出・分析を試みる。「農耕化が人類に何ををもたらしたのか」、この人類史的命題に答えることは、農業（農耕）を基盤とする現代人類社会の歴史的評価にもつながる。

また、社会的には、日本では発掘件数の減少に伴い、縮小化傾向にある考古学を取り巻く社会に新たな資料分析法を提供することで、新たな設備投資や雇用を生み出すとともに学問の大いなる発展に寄与する可能性がある。そして、その成果を諸外国に対して考古学を深化させてゆく具体的な研究モデルとして示すことで、世界規模の需要も期待できる。

【キーワード】

土器総合分析：考古学と高度な科学技術の協働により、土器から正確で新しい情報を抽出する分析研究

【領域設定期間と研究経費】

令和2年度－6年度 379,700千円

【ホームページ等】

<http://www.fhss.kumamoto-u.ac.jp/archaeology/earthenware/>

【学術変革領域研究（A）】

区分 I



研究領域名 中国文明起源解明の新・考古学イニシアティブ

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

なかむら しんいち
中村 慎一

領域番号： 20A103 研究者番号：80237403

【本研究領域の目的】

本研究領域の目的は、新石器時代晩期（紀元前3千年紀後半）の中国に勃興した諸地方文明がやがて黄河中流域へと収斂し、青銅器時代初期（紀元前2千年紀前半）には中国文明として開花する過程を解明することにある。

具体的には、①中国文明形成期において文化的ハイブリディティが果たした役割の究明、②モノの移動の背後にあるヒトの移動の集団・個人レベルでの復元、③初期中国文明の外來要素とプロト・シルクロードの実態解明、の3点が中心的課題である。

これらの目標の達成によって、従来の中国文化論・文明論に刷新を迫り、今後の人類文明の在るべき姿を考える上で“中国四千年の歴史”とも称される中国文明が持つ強靱なレジリアンスの有効性について提言を行い、文理の関連諸科学に考古学の横串を通すことで新たな学問領域を創出する。

【本研究領域の内容】

中国文明起源解明のための考古学の新規戦略（＝イニシアティブ）を提示し、その実践を通じて、中国考古学の長年の懸案と新たな課題を一挙に解決しようとする試みである。具体的には、目に見えるモノから歴史を再構する考古学と、そのモノから目に見えない情報を引き出す考古科学とが対等な立場で協働し、文明形成期の中国における各種威信材の産地及び流通ルートの復元とヒトの移動復元を併せ行う。対象とする威信材は玉器、トルコ石、タカラガイ、ワニ革太鼓、象牙、漆器、特殊土器、水銀朱などである。ヒトの移動については、殉死人骨や供儀人骨など、尋常でない最期を遂げた人骨を主に扱い、その来歴を探る。また、中国文明形成期における西方からのインパクトとその伝播ルートとしてのプロト・シルクロードについて多方面から検討を加え、その実態を解明する。

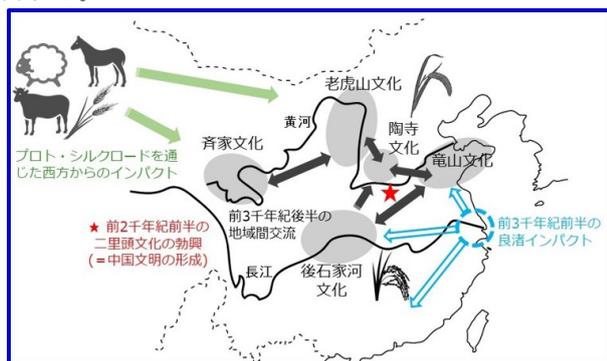


図1 中国文明形成の概念図

【期待される成果と意義】

いわゆる世界四大文明のうち今日まで命脈を保っているのは中国文明のみである。もとより、中国においても洪水などの自然災害はしばしば猛威を振るい、また、大規模な戦乱が絶えず人民を苦しめてきた。それでも、中国文明は途絶えることはなかった。黄河流域の麦作（新石器時代までは雑穀作）、長江流域の稲作、そして西・北方草原地帯の牧畜という、中国文明を特徴付ける生業面での「多重構造」こそが、その強靱なレジリアンスの源泉ではないかと想定される。そうした中国文明の「多重構造」がいかにして形成されたか、その結果、中国文明はメソポタミア、エジプト、インダスといった旧大陸の初期文明やマヤやインカといった新大陸の諸文明とどのように異なる特質を獲得するに至ったのかを明らかにし、世界各地における文明誕生プロセスの多様な在り方について新たな知見を提示する。

中国において青銅器文明が誕生したのは、新石器時代晩期の地方文明の空白地帯であったと言える現在の河南省である。それは、辺境が中心に転化する過程と言い換えることもできる。そこにはヒト・モノ・情報の融合、すなわち文化的ハイブリディティの獲得が大きく作用しているに違いない。そうであるとすれば、生物学の「雑種強勢」のアナロジーが当てはまる。

その際、中国内の各地方文明の融合ばかりでなく、中国外部、特に中央アジアを経由して、遠くメソポタミア文明、あるいはインダス文明に淵源を辿ることのできる文明要素（ムギ、ウシ・ウマ・ヒツジ、青銅器、馬車等）が伝来した可能性が高いことはこれまで中国考古学では十分に議論されてはこなかった。現代の政治・宗教・民族問題などに規制されることなく、中国史を人類史の中に正當に位置付けることも、本研究領域に与えられた重要な課題である。

【キーワード】

中国文明：紀元前2千年紀前半に黄河中流域に勃興した青銅器時代文明。河南省二里頭遺跡を放射の中心として、様々な文明要素が中国各地に波及し、「中国的世界」が形成された。

【領域設定期間と研究経費】

令和2年度－6年度 550,700 千円

【ホームページ等】

[https:// www.chugokubunmei.jp/](https://www.chugokubunmei.jp/)

【学術変革領域研究（A）】

区分 I



研究領域名 イスラーム的コネクティビティにみる信頼構築：世界の分断をのりこえる戦略知の創造

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授

くろき ひでみつ
黒木 英 充

領域番号： 20A104 研究者番号：20195580

【本研究領域の目的】

イスラーム文明には水平方向の人間関係作りに長けてきた特質があります。そのコネクティビティ（関係作り）の蓄積と信頼構築の諸相を明らかにするとともに、そこから得られる暗黙知を、言語化・可視化して戦略知として表現して、現代世界にて深刻化する分断状況を解決するための新たな視座を確立することを目的とします。

イスラームを軸にして、コネクティビティの現場で信頼が創り出されるプロセスを、1400年の時間と地球全体の空間を視野に入れて洗い出します。こうした水平方向の関係作りの問題は、垂直方向の権力関係構築の問題に比べると、イスラーム研究者が何となく意識しつつも、研究の俎上に載せてこなかったものです。また従来の信頼研究においても取り上げられていない、新しい研究領域です。この変革的な領域の課題に対して、諸学問分野の研究者が協働して取り組む、地域研究の大規模プロジェクトです。

【本研究領域の内容】

イスラーム文明は、人々が広域にわたって高い移動性の中で暮らす社会で発展してきました。人・モノ・情報の移動を、「イスラーム経済」「言語・学知の変換」「移民・難民」の観点からコネクティビティの問題として捉えます。通地域的で多元的な文化的環境の中に存在する、様々な境界をどのように越えるのか、そこで他者との間にどのような関係を作り、信頼を構築するのか、がテーマです。

また、信頼が構築される際の、より高い次元での交渉の問題を、「イスラーム国家間関係」「思想戦略」「平和構築」の観点から扱います。ときに厳しい対立関係にある他者であっても、どのようにしたたかな関係作りをして信頼を構築してきたのか、その戦略知を過去から現在の様々な局面の中から探り出す研究を行います。

図1 イスラーム文明—多民族・多宗教 1400年のヨコへの広がり



さらに、近年進展の著しい人文情報学の成果を取り入れて、これらの観点から明らかにされる暗黙知を「見える化」することに挑戦します。この作業を通じて、コネクティビティと信頼構築の研究における新たな問題発見も期待されます。

【期待される成果と意義】

本研究領域に参画する研究者は、日本国内はもちろん、世界各地の関連研究機関や組織との間でのコネクティビティを高め、共同調査・研究を推進して、「イスラーム信頼学プラットフォーム」を形成することを目指しています。こうした研究ネットワークは、本研究領域の研究成果として発表される様々な書籍やオンラインデータなどとともに、今後の世界のイスラーム研究の発展のために重要な基盤を提供することでしょう。また、成果の市民社会への還元も重視して、「シビルダイアログ・キャラバン」という対話の機会も設けます。

50年後の世界ではイスラームがキリスト教を抜いて世界最大の宗教人口になると推測されています。その人口重心はアジア・アフリカ地域にありながらも、イスラーム教徒は今後も世界全域で、コネクティビティを発揮して信頼構築を展開することでしょう。イスラームをめぐっても社会の分断が深刻化する現在、コネクティビティを通じて地球全体の問題に取り組むことにより、今後の国際社会における日本の針路を決めるために必要な、正確なチャートを提供したく考えています。

【キーワード】

コネクティビティ：「つながりをもてること」を意味し、「接続性」とも訳されます。本研究領域ではコネクティビティのアラビア語訳の言葉にある「主体的に動いて関係を作る」という意味で使います。

【領域設定期間と研究経費】

令和2年度－6年度 575,700千円

【ホームページ等】

<https://connectivity.aa-ken.jp/>
connectivity_jimukyoku@tufs.ac.jp